銀世界のエイミー

सितारों की दुनिया की एइमी

Eimee of the Silver World



臼田栄子

एइको उसुदा

Eiko Usuda

Eiko Usuda

Eimee of the Silver World

Pigeon

銀世界のエイミー

सितारों की दुनिया की एइमी

EIMEE OF THE SILVER WORLD



銀世界のエイミー
सितारों की दुनिया की एइमी
EIMEE OF THE SILVER WORLD



臼田栄子
एइको उसुदा
EIKO USUDA

Pigeon Books India

Eimee of the Silver World

This Indian Edition 2015
Copyright © Eiko Usuda

All rights reserved.
No part of this publication may be reproduced,
stored in a retrieval system, or transmitted, in any form
or by any means, electronic, mechanical, photocopying
or otherwise, without the prior permission of the publisher.

Published by
Pigeon Books India
www.pigeonbooks.in
pigeonbooks@yahoo.com
An Imprint of
gbd books
16, Ansari Road, Daryaganj,
(above Union Bank of India)
New Delhi - 110002, India.
www.goyalbookshop.com
generalbookdepot@yahoo.com
Ph.: 9810229648, 9312286851

Reviewer/Hindi Translation:
Ashok K. Chawla

Printed at
Saurabh Printers, Delhi

彼女の名はエイミー
私の付けた名前
二つの小さな願い事と
一つの大きな悲しい約束
ねえエイミー、楽しく笑っているかしら？
私はいつも笑っているわ
真実を見つめぬ人間の生き様を

उसका नाम है एइमी।

जो मैंने दिया था उसे।

दो छोटी कामनाएँ।

और! एक बड़ा दुःखद वायदा।

क्यूँ एइमी। ख़ुशी ख़ुशी मुस्करा रही हो ना।

मुझे देखो। मैं तो हर समय मुस्कुराती रहती हूँ।

सच्चाई से मुहँ मोड़कर जीते हैं, जो लोग, उन पर।

Her name is Eimee
That is the name that I gave her
Two small wishes and
One large, sad promise
Dear Eimee, are you laughing joyfully?
I am always laughing
At the way some people live, with a blind eye to the truth

目次

विषय–सूची

CONTENTS

監修者による序文 13

प्रस्तावना 14

Foreword by Reviewer 15

銀世界のエイミー

序文 19

序 21

失われた心 22

月明かり 23

時 24

雪の魔法 25

銀世界のエイミー 27

第一部：コルカタでの出会い 29

第二部：エイミーの横顔 32

第三部：銀世界への旅立ち 36

सितारों की दुनिया की एइमी

शुरूआत 43

भूमिका 46

खोयी सोच 48

चांदनी 50

समय 51
सफेद बर्फ का जादू 53
सितारों की दुनिया की एइमी 55
भाग–1: कोलकाता में मुलाकात 57
भाग–2: एइमी का दूसरा रूप 61
भाग–3: सितारों की दुनिया में वापसी 67

Eimee of the Silver World

Foreword 75
Prelude 77
A Lost Heart 78
Moonlight 79
Time 80
The Magic of snow 81
Eimee of the Silver World 83
Part 1 Encounter in Kolkata 85
Part 2 Another Side of Eimee 88
Part 3 Departing for the Silver World 91

監修者による序文

本書には著者である臼田栄子の感動的な体験が詩の形で表現されている。栄子はコルカタで一人の少女と出会う機会を得て、その少女にエイミーという新たな名前を与え交流を深め、彼女と共に質の高い時間を過ごす。本書の前半に配置された5編の独立した詩に描写されている真の交友、優しさ、思いやり、そして生きる意味は、この体験から影響を受けた栄子の思考を反映したものだと思われる。私は読者に好評であった栄子の前詩集『ゴムの木　―　愛の形、そして透明へ』の監修を行ったことを通し、その内容が人道的で意義深いものであることを見出した。それにより、本作ではより幅広い読者層のために、英語訳に加え、ヒンディー語による日本語原文内容の再現を収録することを決意した。

インド文化協会、インド側会長
アショクチャウラ

प्रस्तावना

इस पुस्तक में लेखक एइको उसुदा के मार्मिक अनुभवों का काव्यात्मक शैली में वर्णन किया गया है। एइको की कोलकाता में संयोगवश एक छोटी सी लड़की से मुलाकात होती है, और उससे बातचीत के दौरान वह उसे एक नया नाम एइमी देती है। वह उसके साथ अच्छा वक्त गुज़ारती है। सच्ची दोस्ती, दया, करूणा और ज़िन्दगी के मायने को किताब के शुरू में दी गई पांच कविताओं के माध्यम से जिस प्रकार से अभिव्यक्त किया गया है, जान पड़ता है की यह उस अनुभव से प्रभावित एइको की सोच को दर्शा रहा है। मैनें एइको के पिछले संग्रह 'रबड़ का पेड़ – स्नेह की सूरत, स्पष्टता की ओर', जिसे पाठकों ने काफी सराहा था, की समालोचना की थी। और इस पुस्तक की विषय–वस्तु को भी करूणामयी और यथार्थपूर्ण पाया। इसलिए यह निर्णय किया गया कि इस पुस्तक को बड़ी संख्या में पाठक वर्ग तक पहुँचाने के लिए इसके मूल जापानी वर्णन का अनुवाद अंग्रेजी के अलावा हिन्दी में भी उपलब्ध कराया जाए।

अशोक चावला
अध्यक्ष, भारत चैप्टर
भारतीय सांस्कृतिक अध्ययन संघ

Foreword by Reviewer

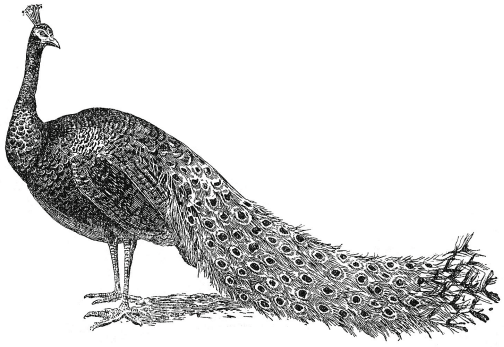
This book renders touching experience of the author Eiko Usuda in poetic style. Eiko meets a small girl by chance in Kolkata, gives her a new name Eimee, interacts with her and spends some quality time with her. True acquaintance, kindness, compassion and meaning of life as depicted in the proceeding five independent poems in the book appear to be the reflection of Eiko's mind influenced by this experience. Having reviewed Eiko's earlier collection "*The Rubber Trees – The Shape of Affection, Moving Toward Clarity*", which was well accepted by the readers, I found the content humane and substantive. It was, thus, decided to include parallel Hindi reproduction of the original Japanese content in addition to English for a wider readership.

Ashok K. Chawla
India-side President
Indian Cultural Study Association

銀世界のエイミー

सितारों की दुनिया की एइमी

Eimee of the Silver World



序文

あるとき私は考えた。人間の運命というものについて。それは、どこで生まれ、どこで育ち、どのように生きるかにより大きく変わる。強者はおごり高ぶり、弱者はいつも怯えながら暮らしている。そして、どちらにせよ、同じく人間は自身に課せられた重さによって押し潰されてしまう。それは、視野の狭さによって、どう考えるかによって、そしてどう生きるかによって。

何が正しいかなどわからない。何が間違いとも言い切れない。

私は仕事の面で恵まれ、世界中を飛び回り、様々な出会いによって多くの友人達に助けられ、大きな出来事も小さく感じられる、そんな視野の広さを育んだ。私は日本という国で生まれ育ち、さらに中東諸国においては、王族や大富豪が過ごす煌びやかな生活をも体験した。

様々な人々に出会い、どのような生活を送ったとしても、私の本来の信念は変わらない。通り過ぎるだけの人々であっても、どんなときにも、どんな日にも、笑顔で接する人間でありたい。そのような考えが逆に強まった。どんな国でも、どんな場所で出会った人々でも、それぞれが抱える重さを少しでも軽くしてあげられる、そんな人間でありたい。たとえそれが、運命という名の想像もつかない重さだったとしても。

そして、世界が西暦2000年のミレニアムを迎えたある日、私はインドのコルカタで一人の少女と出会った。その出会いは運命によって引き寄せられたかのようであり、私がコルカタに滞在した際には常に彼女と共に過ごした。彼女の存在は良き友の一人として、未だ私の心に大きく深く刻まれている。彼女が最後に残してくれた優しい言葉は、友人という枠を超えて、私に本当の愛を与えてくれた。

本書に収められている『銀世界のエイミー』は、そんな愛しい少女と過ごした時間をまとめた物語を詩にしたものであり、他にそれと相補的な詩が5編収録されている。本書を通じて、私が出会った天使のような少女の存在を多くの方々に知ってもらうと共に、人間の運命や優しさというものについて、個々が深く考えるきっかけとなることを祈っている。

序

ある出会いが人生を変えることがある
悪しき出会いと良き出会い
悪しき出会いに惑わされず
良き出会いを友と出来るかは
あなたの持つ心次第

かつての賢者達はこのように言った
良き友を真実の友とすることは
人間の人生のすべてであると
なぜなら真実の友は
あなたを正しき道へと導いていくから
そして真実の友を得るためには
あなた自身も真実の友でならなくてはならない

ある女の子との出会いは
未だ私の心に不変な潤いを与える聖なる水
誰しもが目をそらし
通り過ぎるようなその場所で
私は真実の友を見つけた
そう一瞬にして永遠の友を

失われた心

失われた理想の大地は
このまま失われたままなのだろうか
この地上は誰のものでもないというのに

奪い合う人々、争い合う人々は
すべてを手にしたところで
虚しい心を鎮めることができるのだろうか
愛し愛されることも知らずに

だから私は詩を書き続ける
優しき心を絶やさぬために

希望は道なき道を進み
絶望は作られた道を振り返る
時間をかけた絶望は
人が生きる意味を問いかける
深い苦しみは、やがて温かく
優しい出来事を作るため

月明かり

そんなに急ぎ足でどこへ向かうの
あなたの足元を
こんなに照らしているのに

わたしの存在さえ気付かず
道端の草花を踏みつけてまで
向かうべき場所があるならば
あなたにとって世界は暗闇の中

月明かりの奇麗な夜に空を見上げ
ゆっくりゆっくりと歩きながら
爽やかなそよ風に耳を傾け
わたしに語りかけてみて
本当はどこへ向かうべきなのか
あなたは気付くはずだから

時

時計の針が時を刻む
薄暗い病院の一室の中で
何の心の準備もないままに
若くして病に倒れた父と二人きり
時計の針の音だけが
チクタクチクタクと無機質な音をたてる

まだもの心つかぬ子供には
父親の死を悲しむことさえできず
言葉にならぬ寂しさを乗せるように
ただ一人裏山の頂上からシャボン玉を吹いた

「絶望の中でも笑顔を絶やさず
失意の日にも他人を責めず
お前がお前らしくあるような
優しい人間になりなさい」

吹いては美しく風に踊り
高く舞い上がったシャボン玉は
天に向かってはかなく消えた

雪の魔法

幼き頃の思い出
まだ辺りは暗く人影もない
夜明け前の午前4時半
こっそり一人表に出ると
一面の雪景色が遠くまで広がり
誰の足跡もない粉雪を踏みしめ
冷たくも暖かい雪の上に体を横たえると
何ともいえぬ幸福感に包まれた

ふと空を見上げると
雄大な羽をはばたかせたペガサスや
虹色の孔雀が優雅に通り過ぎていく
そんな神々しい姿を眺めているのが好きだった

心が生んだ幻のように思える
あのとき見た銀色に光る幻想的な雪の魔法は
今でも大人になった私の道を
予言していたかのように照らしている

銀世界のエイミー



第一部：コルカタでの出会い

ミレニアムを一人で過ごそうと思い
コルカタを選んだ
なぜコルカタを選んだのか
私にもわからない
きっと一番静かに過ごせると思ったのだろう

街の景色はけして美しいとは言えず
ガンジス河の臭いと埃が鼻につく
すれ違う人々の瞳には輝きもなく挨拶もない
私の存在さえ忘れられたかのような空間が
逆にとても心地良く感じられた

インドに滞在した際には
孤児院を訪問するのが常であり
いつものようにコルカタでも
いくつかの施設を訪問していた

そんなある日
街を歩いていた道すがら
トントンという音がどこかから聞こえてくる
ふいに横を見ると

見落としていた小さな施設の中で
小さな女の子が窓ガラスを叩いていた

私はその女の子に近づき
「私を呼んでいるの？」と尋ねると
彼女は少しはにかみながら
笑顔でこくりと頭を下げた

私は彼女の名前を知ろうと
「お名前は？」と聞いても一向に返事がない
しばらくすると女の子は寂しそうに
「わたしの名前が嫌いなの」と答えた

続けて私は話しかけた
「私はエイコ、日本から来たの
なぜ自分の名前が嫌いなの？」
それでも彼女は答えなかった
「そう、じゃあ私があなたに名前を付けてあげる
私の名前はエイコだから
エイを取ってエイミーはどうかしら？」

悲しげな顔をした女の子は
とても可愛らしい笑顔を浮かべ
はしゃぎながら言った
「今日からわたしの名前はエイミー
わたしはエイミー」

なぜかしらエイミーにはどんどんと心が惹かれていき
コルカタに滞在中はほとんどの時間を彼女と過ごした
エイミーは他の女の子とは違い
遊ぶことよりも色々な話を聞きたがった
特に私の故郷の雪の話が大好きで
毎日必ず雪の話をしていた

私は心に決めていた
エイミーを必ず私の故郷に連れて行き
雪を見せ楽しく過ごそうと

三週間の滞在も終わりに近づくと
エイミーは二つの小さなお願いをしてきた
一つ目は施設を抜け出して街並みが見たいということ
二つ目は私の泊まっているホテルへ行きたいということ
そんな小さな願い事だった
私はすぐに施設の先生に頼み一日だけ時間をもらった



第二部：エイミーの横顔

私がプレゼントした白く可愛いドレスを着たエイミー
それはまるで天使のようだった
私の付き人だってさぞ鼻が高かったことでしょう
少し街を歩いた後
危ないということで車に乗って街を巡った
車に乗っている間も
エイミーは瞳に焼き付けるように
色々な街並みを見ていた

私達を乗せた車がホテルに着くと
エイミーはその豪華さに驚き少し戸惑った
しかし私は何の心配もしていなかった
「エイミー大丈夫よ
あなたは誰にも負けない素敵なレディーだから
さあ行きましょう」

ホテルの入り口のドアが開いたとたん
やはりホテルマンが話しかけてきた
エイミーの手に汗がにじみ緊張感が伝わってきた
私はホテルマンにエイミーを紹介した
「私の可愛い天使の友人で、エイミーっていうの

よろしくね」と言うと
「はい、エイミーです、よろしく」
と続けて笑顔で応えた
やはりエイミーはどこか気品のある女の子だった

たちまちエイミーはホテル中の人気者となり
ホテルマンに色々な場所を案内してもらったり
特別に楽しい食事もできた
でも食事はやはりインド料理にするべきだったわ
気取ってフランス料理なんかを選んだものだから
エイミーは食べ方がわからない料理に悪戦苦闘して
ついにはムール貝が隣の席まで飛んで行き
少し髪の毛が薄くなった紳士の頭の上に
リボンのように飾られてしまったわね

私達は思わず謝る前に笑ってしまったわよね
つられてその紳士だけではなく
食事をしているすべての人たちが笑っていたわ
エイミーがあんなに笑った顔は初めて見たわよ

賑やかな食事を終え
ホテルの目の前にある動物園に向かう途中
エイミーは道端に生えた木の枝から葉を取り
ペンで書いた100ルピーを作り
少し恥ずかしそうに私に手渡した
それがチップのつもりであったのか
ドレスや食事へのお礼だったのかはわからないが

その愛らしい姿と手作りの紙幣は
優雅で確かなエイミーからの贈り物だった

そして動物園に行った帰り道
疲れたエイミーを背負い歩いていると
私の背中を抱きしめながらエイミーは尋ねた
「わたしはずっと施設の窓辺から外を眺めていたけれど
行き過ぎる人々はわたし達のことを
汚いものを見るかのような眼をしていたわ
エイコ、なぜあなたはわたしに
こんなに優しくしてくれるの？」

だから私は答えた
「あなたに優しくするのは人間として当然のことよ
あなた達を蔑むような眼を持つ人々は
少しだけ頭の良いお猿さんのようなものよ
本当は助け合える生き物なのに
神様はこんな世の中になるとは思わなかったでしょうね」

続けてエイミーは寂しそうに呟いた
「温かいね、このまま時間が止まれば良いのに
もし一つだけ願いが叶うなら
いつかわたしのことを本に書いて
そうすればわたしは忘れられることなく
世界中を飛び回ることが出来るから」

エイミー、あなたは知っていたのね
残された時間が少ないということを
私があなたを背負ったのは
自然と溢れ出してしまいそうな涙を
見られたくなかったから

私は自分の無力さに絶望していた
エイミーはどうにもならない不治の病に侵されていた
これからどのくらいの思い出を作っていけるのだろうか
そんなことを考えながら私は歩いていた
エイミーから伝わる背中の温もりを感じながら
しかしこれが私とエイミーとの
最後の楽しい思い出となった



第三部：銀世界への旅立ち

それから帰国して数ヶ月が経った頃
施設の先生から連絡をもらった
エイミーの容体があまり良くないという報告だった
私は急遽コルカタへと向かった

ベッドの上で寝ていたエイミーは
細く小さく横たわっていた
私はエイミーを抱き上げ
「約束通り帰ってきたわよ」と言うと
「必ず来てくれると信じて待っていたの
またあの白いドレスを着せて
あの雪の話を聞かせて」
とエイミーはお願いした

エイミー、私があなたと同じ６歳の頃
あなたと出会ったときと同じように
外を吹く風が窓を叩いて私を呼んだの
吹雪の後の新雪は
月明かりに照らされ
きらきらと青く銀色に輝いていた

あんな神秘的な雪景色を見たのは初めてだった
その後に始まる風と雪の幻影がなぜか想像できた

急に風が強く吹き始め
私は息を呑んだ
表面に降り積もった新しい粉雪はきらきらと舞い上がり
まるで天に向かって走る馬
天馬の姿を形作り
そしてそのまま大空へ遠く高く飛び去っていった

エイミー、お迎えが来たわ
銀色に輝く雪の天馬が見えるでしょう？
あなたとの悲しい最後のお別れ
あなたの夢見た雪の銀世界
幼き頃に見たあの天馬は
あなたのためだったのだと今はわかるわ

さあその天馬に乗って頂戴
この世に生まれた苦しみを忘れ
すべてを感じすべてを見渡すことができるから
さよならは言わないわ
だってあなたはとても幸せそうな
笑顔をしているのだもの

「エイコ、たった一人のわたしの家族
わたしは昔の名前が大嫌いだった
番号のように付けられた名前だったから

でも今はエイコが名前を付けてくれた
エイコがこれから幸せであるために
エイコの抱えた悲しみを
わたしが全部運んで行ってあげる
わたしの名前はエイミー
ママ、ありがとう」
そしてエイミーは私の腕の中で
雪のように消えていった

最愛なる天使、最愛なる私の娘
ただ一人私の悲しみを打ち明けることができた
最愛なる真実の友
また必ずどこかで会いましょう
でもこんな世の中に
再びあなたが降りてくる必要などないわ
あなたとの大きな約束を果たしたら
いつか私からあなたに会いに行くから
そのときに話し合いましょう
この世の中が本当はどのようにあるべきなのか

エイミー、これだけは伝えておくわ
たとえ長く生きたとしても
生かされる意味を知らなければ何の価値もないの
ことごとく人の心は季節のように移ろい
たとえ心の重さを軽くしてあげたとしても
時が過ぎれば忘れられてしまうもの

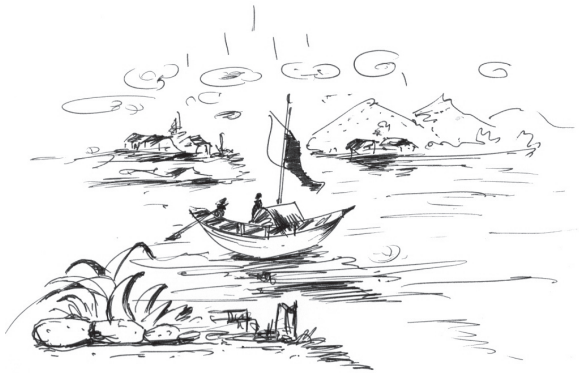
それでも私を必要としている人がいるから
まだ私の仕事が終わることはない

ビルの隙間を通る風が楽しいリズムに聞こえ
地べたを這いずり回る微かな欲望の音も自在に聞き分け
すべての醜い雑音が心地よく感じられるようになったら
私の勝利の音を天高く鳴らすわ
それが優しい真実の音

誰にも言えぬ苦しみが
記憶の奥底で軋む孤独で悲しい夜に
トントンと心の窓を叩く音が聞こえたら
勇気を出してその窓を開けてみて
姿を隠した真実の友が
あなたを待っているから

彼女の名はエイミー
私の付けた名前

सितारों की दुनिया की एइमी



शुरूआत

एक दिन मेरे मन में एक ख्याल आया। इंसान की तकदीर को ले कर। जो बदल जाती है। इस पर कि वो कहाँ जन्म लेता है, कहाँ बड़ा होता है और कैसे जीता है। एक ताकतवर तिरस्कारपूर्वक अकड़ कर रहता है, जबकि निर्बल डरते–डरते जीता है। अंततः दानों ही सांसारिक बोझ तले दब जाते हैं। यह निर्भर करता है, उनकी संकीर्ण मानसिकता पर, उनकी सोच पर, उनकी जीवनशैली पर।

क्या सच है। मैं नहीं जानती। क्या गलत है। मैं कोई दावा नही कर सकती।

जहाँ तक मेरी बात है, मेरे कैरियर का सफर बहुत सफल रहा।

मुझे दुनिया भर में घूमने का मौका मिला, अनेक प्रकार के लोगों से मिलने का संयोग प्राप्त हुआ, जिसके द्वारा बहुत दोस्तों से मदद प्राप्त हुई। बड़ी–बड़ी घटनाऐं भी छोटी लगने लगी। और मेरी सोच का दायरा व्यापक बना। मेरा जन्म जापान देश

में हुआ, और मैं वहीं पली–बढ़ी। मुझे मध्य पूर्व में शाही परिवारों और बेहद अमीर लोगों के जैसा जीवन अनुभव करने का अवसर भी मिला।

लेकिन, मैं कितने ही लोगों से क्यूँ ना मिली हूँ, मैने कैसी ही जिन्दगी क्यूँ न जी हो, मेरी बुनियादी धारणा नहीं बदली। मैं ऐसी इंसान बनूँ, कि कैसा भी समय हो, कैसा भी दिन हो, मुस्कुराहट से अभिनंदन करूँ, उनका भी, जो चाहे केवल पास से गुजर जाने वाले ही क्यूँ ना हों। यह सोच उल्टा और भी गहराती गई।

किसी भी देश में, या कैसी भी जगह पर मिले लोगों के मन के बोझ को थोड़ा बहुत भी हल्का करने में कुछ मदद कर पाऊँ, मै ऐसी इंसान बनूं। भले ही वह नसीब कहा जाने वाला अकल्पनीय बोझ ही क्यूँ न हो।

और फिर एक दिन, सन् 2000 में नई सहस्राब्दि के शूरू होते ही, मैं भारत के कोलकाता शहर मैं एक छोटी बच्ची से मिली। शायद यह नियति ही थी जिसने हम दोनों को मिलाया था, और मैं कोलकाता में अपना सारा वक्त उसी के साथ गुजारने लगी। उसका मेरी जिंदगी में आना, आज भी एक प्यारे साथ के रूप में मेरे दिल की गहराईयों में बसा हुआ है। आखिरी लमहों में

बोले गए उसके स्नेहसिक्त शब्दों ने दोस्ती की सीमा पार कर मुझे सच्चे प्यार से रूबरू कराया।

इस पुस्तक में संकलित ''सितारों की दुनिया की एइमी'' कवित्व शैली में लिखी गई इस प्यारी सी बच्ची के साथ बिताये वक्त की कहानी है। शीर्षक कविता के अलावा इसमें पांच अन्य कविताएँ है। इस पुस्तक के जरिए मैं चाहती हूँ कि ज्यादा से ज्यादा लोग इस परी जैसी छोटी बच्ची के जीवन को जाने और प्रार्थना करती हूँ कि इस पुस्तक को पढ़ने वाले हरेक व्यक्ति के मन में दया भाव पैदा हो। और वह नियति के बारे में गहराई से सोचने को विवश हो।

भूमिका

कोई एक मुलाकात इंसान का जीवन बदल सकती है
अच्छी मुलाकात, बुरी मुलाकात
बुरी मुलाकात से भ्रमित न हो के
अच्छी मुलाकात को दोस्ती में बदल पाना
सब आपके दिल पर निर्भर करता है।

पिछले युग के ज्ञानी लोगों ने कुछ ऐसा कहा था –
एक अच्छे दोस्त को सच्चे दोस्त में बदलना
इंसान के जीवन का सब कुछ है
क्योंकि, एक सच्चा दोस्त ही
आपको सही रास्ते पर ले जाता है
और सच्चा दोस्त पाने के लिए
आपको खुद भी सच्चा दोस्त बनना पड़ता है।

एक छोटी बच्ची से हुई मेरी मुलाकात
पवित्र जल की तरह आज भी मेरे मन को निरंतर सींचती है
जहाँ कोई भी नज़र चुराए गुजर जाए
उस जगह पर
मैंने तो एक सच्चा दोस्त पाया
हाँ, एक क्षण में अनंत काल तक के दोस्त को पाया।

खोयी सोच

खो दिया जो आदर्श सँसार
क्या हमेशा खोया ही रहेगा
जबकि, यह सँसार तो किसी का है ही नहीं।

छीनते, झपटते! लड़ते, मरते!
सब हासिल कर लेने पर भी
अपने सूने मन को शांत कर पाते हैं, क्या ये लोग
प्यार करना या प्यार पाना, जाने बिना ही!

इसी कारण मैं निरंतर कविता लिखती हूँ
भले मन को जीवित रखने के लिए।

उम्मीद तो नारास्ते रास्ते पर चले
मायूसी बने रास्ते पर भी पीछे मुड़ देखे
और, थोड़ा समय बिताने पर पूछे
जिँदा रहने का मतलब
गहरा दर्द ही, आखिर बने गर्मजोश
उदार कर्म करने को।

चांदनी

इतने तेज कदमों से कहां चले जा रहे हो
देखो, तुम्हारे कदमों के आगे तो
इतनी रोशनी बिछाई हैं।

तुम्हें तो मेरे होने का एहसास ही नहीं
यहां तक कि रास्ते किनारे लगे पौधों को भी रौंदते जा रहे हो
यदि तुम्हारी कोई मंजिल है तो भी
तुम्हारे लिये तो दुनिया अंधकारमय होगी।

खूबसूरत चांदनी रात में आकाश को देखो
धीमे धीमे चलते चलते
निर्मल मंद बयार पर कान लगाये
मुझसे बात करके देखो –
वास्तव में तुम्हें कहां जाना चाहिए।
मेरा मानना है, तुम्हें जरूर इसका एहसास होगा।

समय

घड़ी की सूईयों की टिक–टिक समय बढ़ा रही थी
धुंधले प्रकाश वाले अस्पताल के एक कमरे में
किसी भी तरह की भावनाओं से अछूती
बीमार जवान पिता के साथ अकेले में
केवल घड़ी की सुईयों की आवाज
टिक टॉक, टीक टॉक – एक नीरस सा समा बांध रही थी।

दीन–दुनिया से बेखबर बच्ची
नहीं जानती, कैसे करे पिता की मौत का गम
जैसे अपनी अव्यक्त उदासी को, अकले ही
घर के पीछे पहाड़ की चोटी पर चढ़,
साबुन के बुलबुले पर उड़ाती है।

''निराशा के बीच भी मुस्कुराहट बनाये रखो
मायूसी के दिन भी किसी को दोष न दो
तुम जैसी हो वैसी ही
सदय इंसान बनो।''

उड़ाते ही, हवा में लहराए
ऊंचे उठते साबुन के बुलबुले
स्वर्ग की ओर बढ़ते, कहीं दूर गगन में विलीन हो गए।

सफेद बर्फ का जादू

मेरे बचपन के दिनों की यादें
बाहर अभी अंधेरा था, किसी का साया भी ना था
भोर होने को थी, वक्त साढ़ें चार बजे का था।
चुपके से मैं बाहर निकली
दूर–दूर तक बर्फ की चादर फैली थी।
अनछुई बर्फ की चादर पर दृढ़ता से कदम रखे।
और जब उसी ठंडी मगर सुकून देने वाली बर्फ पर लेटी
एक अजीब सी खुशी में लिपटने का अहसास हुआ।

ज्यूँ ही आकाश की तरफ नज़र उठाई
एक विशाल पंख फड़फड़ाता पेगासस
और, इंद्रधनुष के रंगो का एक मोर
नज़ाकत से ऊपर से गुजरता है।
इन दिव्य रूपों को निहारते रहना अच्छा लगता था।

शायद यह मेरे मन की उमड़ती–घुमड़ती कल्पनाएं ही थीं।
मगर उस समय देखा चाँदी सा झिलमिलाते
बर्फ का काल्पनिक जादू
जैसे आज भी मेरी डगर को
रोशन कर रहा है, अतीत में की गयी किसी
भविष्यवाणी की तरह।

सितारों की दुनिया की एइमी



भाग–1: कोलकाता में मुलाकात

नई सहस्राब्दी का अकेले स्वागत करने का सोच
मैनें कोलकाता को चुना
कोलकाता ही क्यूँ चुना
मुझे भी समझ नहीं आता
जरूर अधिकतम शांति से गुजारने का सोचा होगा।

शहर का नज़ारा किसी भी दृष्टि से खूबसूरत
तो नहीं कहा जा सकता था
गंगा नदी की तरफ से आने वाली बदबू और
धूल परेशान कर रही थी
पास से गुज़रने वालों की आंखों में न तो चमक थी
और न ही लब पर दो बोल
यह क्षण जैसे कि मेरे होने को ही नकार रहा था
लेकिन मुझे इससे उल्ट बहुत सुकून महसूस हुआ।

मैं जब भी भारत आती
अनाथालय जरूर जाती
हमेशा की तरह, कोलकाता में भी
कई ऐसे स्थानों पर गई।

ऐसे में एक दिन
जब मैं रास्ते से गुजर रही थी
कहीं से थपथपाने की आवाज आ रही थी
अचानक मैंने उस तरफ देखा
कि एक छोटी सी इमारत में,
जिस पर अब तक नजर नहीं पड़ी थी
एक बच्ची खिड़की के शीशे को थपथपा रही थी।

मैं लड़की के पास गई
और पूछा, कि, ''क्या तुम मुझे बुला रही हो?''
उसने शर्माते और हल्के से मुस्कुराते हुए
हाँ में सिर हिलाया।

उसका नाम जानने की कोशिश में
''तुम्हारा नाम क्या है?'' पूछने पर भी कोई उत्तर नहीं मिला,
कुछ देर बाद, उसने असहाय भाव से उत्तर दिया,
''मुझे मेरा नाम पसंद नही''।

मैंने उस से आगे बात की
''मेरा नाम एइको हैं, मैं जापान से आई हूँ
क्यूँ तुम्हें अपना नाम पसंद नहीं है?''
उस पर भी उसने उत्तर नहीं दिया।

''ठीक है, तब मैं तुम्हें एक नाम देती हूँ
मेरा नाम एइको है, इसलिए
'एइ' को ले लते हैं, एइमी कैसा रहेगा''

उदास दिखने वाली वह लड़की
बहुत प्यारा सा चेहरा बनाये
खुश होकर बोली
''आज से मेरा नाम एइमी
मैं एइमी।''

जाने क्यूं, मैं एइमी की ओर खिंचने लगी
कोलकाता में अपना अधिकांश वक्त उसके साथ गुज़ारने लगी
एइमी को और लड़कियों से अलग
खेलेने की बजाय कई तरह की कहानियां सुनना पसंद था
खासकर मेरे जन्म स्थान से जुड़ी बर्फ की कहानियां
मैं रोज़ाना उसे बर्फ की कहानियां जरूर सुनाया करती थी।

मैंने अपने मन में तय किया था
एइमी को जरूर अपने साथ अपने गांव ले जाउंगी
उसे बर्फ दिखाऊंगी, और ख़ुशी ख़ुशी हम साथ वक्त गुजारेंगे।

मेरे तीन हफ्ते का प्रवास समाप्त हो रहा था
एइमी ने मुझे दो छोटी इच्छाएं बताई
एक, वह अनाथालय से बाहर निकलकर
शहर देखना चाहती थी
दूसरी, वह उस होटल में जाना चाहती थी
जहां मैं रह रही थी
बस ये छोटी सी कामनाएं थीं
मैंने तुरंत अनाथालय के डायरेक्टर से अनुरोध किया,
और एइमी के लिए सिर्फ एक दिन का समय पाया।

भाग–2: एइमी का दूसरा रूप

मेरे द्वारा दी गयी खूबसूरत सफेद पोशाक पहने
एइमी बिल्कुल फरिश्ते के समान लग रही थी
वह मेरे साथ होने से इतरा कर चल रही थी
कुछ देर घूमने के बाद,
सड़क पर चलने मे खतरा था,
इसलिए कार ले कर शहर घूमा
कार में भी वह शहर को ऐसे घूर रही थी
मानों अपनी आंखों में
हर तस्वीर कैद कर लेना चाहती हो।

जब हमारी कार होटल पहुंची
एइमी उस वैभव को देख हैरान सी अपने में सिमट गई
किंतु मैं किसी प्रकार की चिंता नहीं कर रही थी
''सब ठीक है एइमी,
तुम किसी से भी ना पिछड़ने वाली एक खूबसूरत लेडी हो।
आओ हम अंदर चलें।''

जैसे ही होटल का दरवाजा खुला
अनुमान के अनुसार, होटल का कर्मचारी
हमसे बात करने लगा
एइमी की हथेलियों में पसीना आने लगा,
मैं उसकी घबराहट को महसूस कर रही थी
मैंने तुरंत उस कर्मचारी से एइमी का परिचय कराया
''यह मेरी प्यारी और परी सी दोस्त है, एइमी बुलाते हैं इसे
इसका ख्याल रखिएगा।''
''जीं! मेरा नाम एइमी है, आपसे मिलकर खुशी हुई''
मेरे बाद एइमी ने मुस्कुराते हुए कहा।
मैं जानती थी वह अंदर से एक शालीन बच्ची थी।

देखते ही देखते एइमी होटल में सबकी चहेती बन गई
होटल के कर्मचारी ने उसे होटल दिखाया
और उसने एक खास और आनंदमय
भोजन का भी लुत्फ लिया
लेकिन बाद में मुझे लगा, उसे भारतीय पकवान
ही खिलाने चाहिए थे

मैं उसे फ्रैंच रेस्त्रां की शानो–शौकत दिखाने से अपने
को रोक नहीं सकी थी
एइमी खाने का सही तरीका न जानने के कारण
उससे जूझने लगी
आखिर शंबुक सीप उड़कर दूसरी मेज पर बैठे
कम बाल वाले एक सज्जन के सिर पर टप से गिरी
और ऐसे सज गयी मानो कोई रिबन हो।

अनजाने, माफी मांगने से पहले ही, हम हंस पड़े
और इसके साथ ही, ना सिर्फ वो सज्जन,
बल्कि वहां खाना खा रहा हर शक्स खिलखिलाकर हंसने लगा
एइमी का ऐसा हंसता चेहरा, मैने पहली बार देखा था।

बड़े खुशनुमा माहौल में खाना खत्म कर
होटल के सामने चिड़िया घर जाते हुए
एइमी ने सड़क के किनारे लगे पेड़ से एक पत्ती तोड़ी
और उस पर पैन से 100 रूपए का एक नोट बनाया
और शार्माते हुए मेरी और बढ़ा दिया
क्या यह टिप देने की इच्छा से था

या शायद पोशाक या भोजन के लिए धन्यवाद,
मुझे नहीं मालूम
लेकिन इस प्यारी बच्ची द्वारा हाथ से बनाया प्यारा सा वो नोट
निश्चित ही एइमी का एक सच्चा तोहफा था।

और फिर चिड़ियाघर से लौटते समय
मैं थकी हुई एइमी को अपनी पीठ पर उठाए चल रही थी
उसने मुझे जोर से पकड़ कर पूछा
''मैं अनाथालय की खिड़की से लगातार बाहर देखती रहती थी
लेकिन यहां से गुजरने वाले लोग
हमारी तरफ ऐसी नज़र से देखते थे
जैसे हम कोई घृणा की वस्तु हों
''एइको, तुम मेरे साथ
इतनी सहृदयता से पेश क्यों आ रही हो?''

मैंने उत्तर दिया,
तुमसे सहृदयता से पेश आना,
एक इंसान की हैसियत से स्वाभाविक है
जो लोग तुम्हें नफरत से देखते हैं

वे और कुछ नहीं थोड़े से बुद्धिमान बंदर जैसे हैं
असल में तो हम एक दूसरे की मदद
कर सकने में कुशल लोग हैं
शायद ईश्वर ने नहीं सोचा होगा कि ऐसा सँसार बनेगा।

तब एइमी उदास मन से बुदबुदाई
''कितना अच्छा लग रहा है। काश! वक्त यहीं ठहर जाता
अगर मेरी एक और इच्छा पूरी हो पाये।
तुम मेरे बारे में किताब लिखना
क्योंकि, ऐसा करने से मुझे भुलाया नहीं जा सकेगा
और मैं पूरी दुनिया घूम पाऊँगी।''

एइमी! तुम्हें मालूम था ना
कि बचा हुआ वक्त थोड़ा ही है
मैंने तुम्हें अपनी पीठ पर उठाया था
क्योंकि मैं नहीं चाहती थी
कि आंखो से सहज ही बह निकलने वाले थे
जो आंसू, वो तुम्हे दिखें।

मैं अपनी बेबसी से मायूस हो गई
एइमी एक लाइलाज बीमारी से पीड़ित थी
जिसका कोई उपाय ना था
उसके साथ और कितने यादगार पलों को संजो सकती हूँ
यह सोच कर, मैं चलती रही
अपनी पीठ पर उसकी गर्माहट को महसूस करते करते
लेकिन ये एइमी और मेरे बीच
आखिरी खुशनुमा यादगार पल बनकर रह गया।

भाग–3ः सितारों की दुनिया में वापसी

जापान लौटने के बाद कुछ महीने बीत चुके थे
अनाथालय के डायरेक्टर से खबर आई
एइमी की हालत अच्छी नहीं है
मैं तुरंत कोलकाता की तरफ चली।

बिस्तर पर लेटी हुई एइमी
दुबली–पतली छोटी सी लग रही थी
मैंने उसे अपनी बाहों में उठा लिया और उससे कहा
''मैं अपने वायदे के अनुसार लौट आई हूँ''
''मैं तुम्हारा ही इंतजार कर रही थी,
मैं जानती थी तुम जरूर लौटकर आओगी
फिर से वह सफेद पोशाक पहनाओ
और उसी बर्फ की कहानियाँ सुनाओ''
एइमी ने अनुरोध किया।

एइमी, जब मैं छह साल की थी
बिल्कुल तुम्हारी तरह, जब हम पहली बार मिले थे
बाहर चल रही हवा ने खिड़की पर दस्तक दे कर मुझे बुलाया
बर्फ़ानी तूफ़ान के बाद की अक्षत बर्फ
चाँद की चाँदनी से जगमगाती
टिमटिमाती नीले चाँदी से रंग में झिलमिला रही थी
मैनें इतना रहस्यमय बर्फ का दृश्य पहली बार देखा था
न जाने क्यूं, उसके बाद आने वाली हवा और
बर्फ के भ्रम जाल की कल्पना कर सकी।

अचानक हवा तेज बहने लगी
मैंने अपनी सांस रोक ली
ऊपरी तल पर इकट्ठी हुई पाउडर बर्फ,
चमचमाते, ऊपर की और उड़ने लगी
जैसे कोई घोड़ा स्वर्ग की और दौड़ रहा हो
इसने पेगॉसस का रूप बनाया
और वैसे ही विशाल आकाश में दूर ऊंचा उड़ गया।

एइमी, यह तुम्हें लेने आया है
चाँदी सा चमचमाता बर्फ का पेगॉसस, दिख रहा है ना!
यह तुमसे मेरी अंतिम, उदास विदाई है
तुमने जो सपने में देखी बर्फीले सितारों की दुनिया
यह पेगॉसस जो मैंने अपने बचपन में देखा था
आज जाना कि वह तुम्हारे लिये था।

चलो अब इस घोड़े पर चढ़ जाओ
इस दुनिया में जन्म लेने के दुख को भूल जाओ
तुम कुछ भी महसूस कर सकती हो,
हर चीज बारीकी से देख सकती हो
मैं तुम्हें अलविदा नहीं कहूंगी
क्योंकि, तुम तो इतनी खुश लग रही हो
देखो! तुम कैसे मुस्करा रही हो।

''एइको, मुझ अकेली का तुम ही परिवार हो
मुझे अपना पुराना नाम बेहद नापसंद था
एक नबंर की तरह दिया हुआ नाम था
लेकिन अब एइको ने मुझे एक नाम दिया

एइको अब से खुश रह सके
इसलिए वे ग़म जो एइको के सीने में हैं
मैं सभी अपने साथ ले जाउंगी
मेरा नाम एइमी है
धन्यवाद माँ''
और एइमी मेरी बाहों से
बर्फ की तरह पिघल कर निकल गई।

ओ मेरे प्यारे फरिश्ते, मेरी प्यारी बेटी
केवल तुम ही थी जिससे मैं अपना दुख बांट सकी
मेरी प्यारी दुलारी, सच्ची दोस्त
हम निस्संदेह फिर कहीं मिलेंगे
लेकिन ऐसी दुनिया में
तुम्हें फिर से उतर के आने की कोई जरूरत नहीं
तुमसे किया बड़ा वायदा पूरा करके
कभी मैं तुम्हें मिलने आउंगी
तब बातें करेंगे
कि यह दुनिया वास्तव में कैसी होनी चाहिए।

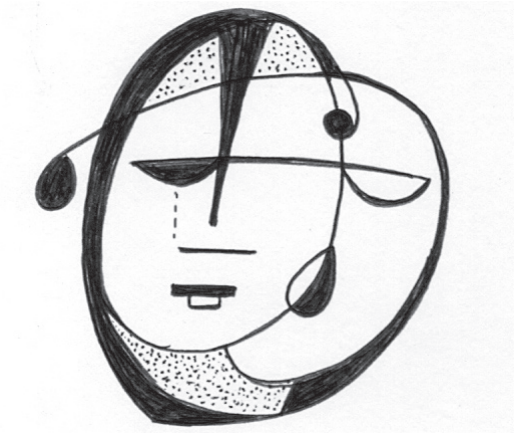
लेकिन आज इतना तो बता देती हूँ
अगर हम लंबा जी लिए तो भी
जिन्दा रखे जाने का अर्थ नहीं जाना
तो इसका कुछ भी मूल्य नहीं
इसमें कोई शक नहीं कि अक्सर इंसान का
दिल बदल जाता है, ठीक मौसम की तरह
आज उनके मन का बोझ कुछ हल्का कर भी दो तो
समय गुजरने पर इसे भुला दिया जाता है
फिर भी, कुछ हैं जिनको मेरी जरूरत है
इसलिए अभी मेरा काम खत्म नहीं होने वाला है।

जब ऊंची इमारतों के बीच से गुजरने वाली हवा
खुशी में लयबद्ध सुनाई दे
और आंखों को जो न दिखे, ऐसी छुपी हुई
भूख की आवाज भी खुदबखुद भाँप पाऊं
सभी घिनौनी आवाजें भी अच्छी सी महसूस होने लगें
तब मैं अपनी जीत का बिगुल बजा दूंगी
वह सदय सच की आवाज होगी।

वो दुख जो किसी को भी न कह पाएं
यादों की गहराई में, सन्नाटे वाली उदास रात में
यदि तुम्हें अपने दिल की खिड़की पर थपथपाने
की कोई आवाज सुने
तो हिम्मत करके उस खिड़की को खोल कर देखना
कोई छुपा बैठा सच्चा दोस्त
तुम्हारा इंतजार कर रहा होगा।

उसका नाम था एइमी।
मेरा दिया हुआ।

Eimee of the Silver World



Foreword

One day, something about human destiny occurred to me. That it is largely dependent upon where we are born, how we are raised, and how we live. The strong are arrogant and contemptuous, and the weak live cowering in fear. And in either case, all humans are crushed by the heavy load that is imposed upon them. This depends on how narrow their minds are, their way of thinking, and their way of living.

It is not for me to say what is correct. Nor for me to declare what is wrong.

Myself, I was very fortunate in my career. I had the opportunity to travel the world over, meet countless people, and gain the support of many friends. I was able to cultivate a broad outlook that made even large incidents feel small. I was born and raised in Japan, and I have also experienced the glamorous life reserved for the extremely wealthy and royalty in the Middle East.

No matter how many people I meet and whatever kind of life I lead, my essential beliefs never change. I hope to be someone who can greet others, whenever, on

whatever kind of day, with a smile—even people who are merely passing by. I am growing increasingly convinced of this. My hope is to help lighten the load of the people I meet in any country, any place, even if only just a little bit. That is the kind of person I wish to be. Even if that load is of the unfathomable weight called fate.

And then one day, shortly after the dawn of the new millennium in 2000, I met a young girl in Kolkata, India. It was as if fate had brought us together, and I proceeded to spend all my time in Kolkata with her. Her existence as a dear friend is still etched deep within my heart. The kind words she spoke to me in the end takes us beyond the bounds of friendship—they gave me the gift of the truest kind of love.

The work *Eimee of the Silver World* tells a poetic story based on the time I spent with this lovely young girl. Along with the title poem, there are five complementary poems. My hope for this book is not only that it spreads the word about the existence of this angelic young girl I met, but I also pray that it provides an opportunity for everyone who reads it to think deeply about human kindness and fate.

Prelude

Certain encounters can change your life
Bad encounters and good encounters
Whether you can turn a good encounter into a friend
Instead of being misled by bad encounters
Depends upon your heart

Wise people said this, long ago—
To turn a good friend into a true friend
That is everything for humans in this life
Because a true friend
Will bring you to the true path
And to make a true friend
You yourself must be a true friend

My encounter with a particular girl
Is a holy water that forever nourishes my heart
In that place where people pass by
Averting their eyes
I found a true friend
Yes, in an instant I found an eternal friend

A Lost Heart

Has this lost, ideal land
Been lost forever like this
Even though this world belongs to no one

Those who take and fight over things
When they have finally gotten it all
Are they able to calm their empty hearts
Without knowing how to love and be loved

This is why I continue to write poems
To keep alive the kindness of the heart

Hope travels along the path where there is no path
Despair looks backwards upon the created path
Despair over time
Asks what it means for people to live
Deep suffering gradually warms
In order to create a gentle event

Moonlight

Where are you going with such hurried steps
Even though I shine so much light on your feet

You don't even notice my existence
If there is some destination you have
That makes you trample the plants at the edge of the path
The world, to you, might be in complete darkness

Look up at the sky on a beautiful moonlit night
Walk very very slowly
Listen to the cool, gentle breeze
And try to talk to me—
You just might realize
Where you really should be headed

Time

The hands of the clock mark the time
In a dimly lit hospital room
I am not emotionally prepared
To be alone with my young father who has fallen ill
The only the sound is the hands of the clock
Tick, tock, tick, tock—it is a cold, mechanical sound

A child who does not understand too much
Is unable to mourn the death of her father
She placed this inarticulate sadness upon the soap bubbles
Blown from atop the hill out back, all alone

"Keep smiling in the midst of despair
Do not blame others in the face of adversity
Become a kind human being
So that you can be most like yourself."

These bubbles that danced beautifully in the wind
Floating up high
Disappeared, headed for heaven

The magic of snow

A memory from my younger days
It was dark and there was no one around
4:30 in the morning, before dawn
I snuck outside by myself
The snow had covered everything far and wide
I walked atop the untouched powdery snow
And when I lay down upon the snow that was cold, but warm
I felt surrounded by an unspeakable happiness

When I glanced up at the billows above
There was Pegasus, giant wings spread, flapping
A rainbow-colored peacock elegantly passing by
I loved to watch their divine forms

I think they are mirages born of the heart
That the shimmering silver fantastical magic of snow that
I saw back then was
Casting light upon my path—
As if forecasting my way now, as an adult

Eimee of the Silver World



Part 1
Encounter in Kolkata

Looking to be alone to welcome the new millennium
I chose Kolkata
I do not know myself
Why I chose Kolkata
I probably thought that I could find some peace and quiet there

The city was anything but beautiful
The smell of the Ganges, and the dust, were hard on my nose
There were no greetings, no sparkle in the eyes of passersby
This place seemed to obliterate my very existence
Which actually felt quite comfortable

It was my routine to visit orphanages
Whenever I went to India
And so I was visiting several places
This time in Kolkata

Then one day
As I was walking down the street
I heard a knocking sound coming from somewhere
I turned and looked to the side
And in a small building I had overlooked
A young girl was tapping on the window

I approached the girl and asked,
"Are you calling out to me?"
And with a shy, slight smile,
She gave a small nod.

"What's your name?" I asked
But received no reply
After a while, she replied sadly,
"I don't like my name."
I continued to talk to her,
"My name is Eiko, I come from Japan
Why don't you like your name?"
But still she did not reply

"Okay, then I will give you a name
My name is Eiko, so let's use the 'Ei'
How about Eimee?"

A delighted smile came upon the face
Of the sad-looking girl
And she started to say, joyfully,
"From today, my name is Eimee.
I'm Eimee."

For some reason I was increasingly drawn to Eimee
And spent most of my time in Kolkata with her
Eimee was different from other girls
Instead of playing, she wanted to hear all kinds of stories
Especially stories about snow, back where I am from
Every day I told her stories about snow

I had promised myself
That one day I would take Eimee to my home
Show her the snow, and have a good time together

As my three-week stay was coming to a close
Eimee had two small things she wished of me
One was that she wanted to leave the orphanage
and take a look at the city
The second was that she wanted to go to the hotel
where I was staying
These were her small wishes
I went right away to ask the director of the orphanage
if I could spend a day with Eimee



Part 2
Another side of Eimee

Eimee put on the pretty white dress I brought her
She looked just like an angel in it
She must have been proud to be my companion
We walked around the city, but after a while
Because it was dangerous, we went around in a car
Even in the car
She stared at the city as if to burn the images into her eyes

When our car arrived at the hotel
Eimee was surprised, bewildered by how grand it was
But I was not worried at all
"It's okay, Eimee
You are a beautiful lady, no one is better than you
Now let us go in"

As soon as the entrance to the hotel was opened
The man from the hotel started to talk to us
I could feel the sweaty nervousness from the
palms of Eimee's hands
I introduced Eimee right away
"I am delighted to introduce to you
My dear angelic friend, Eimee"
And then Eimee continued with a smile,
"My name is Eimee, nice to meet you."
I knew she was a girl with grace

It was not long before Eimee became a big hit at the hotel
The hotel man showed her around
And she got to enjoy a special, delicious meal
But I think I should have stuck to Indian cuisine
I wanted to show off and take her to a French restaurant
But she struggled without knowing the proper way to eat
The mussel shell flew over to the table next to us
Landing on the head of a gentleman whose hair was thinning
Giving him a decoration not unlike a bow
We found ourselves laughing before we could apologize
But everyone including that gentleman was laughing by then
The people dining there were all laughing
I had never seen you laughing like that before, Eimee

After our lively meal came to an end
And on our way to the zoo across from the hotel
Eimee grabbed a leaf from a branch of a
tree growing by the street
And drew a homemade 100 rupee bill
And shyly handed it to me
I don't know if that was supposed to be a tip
Or something to say thanks for the dress or the meal
But that handmade bill made by this lovely child
Was a genuine, elegant gift

And then on the way home after the zoo
I walked along carrying the tired Eimee on my back
She asked me, while holding me tight
"I would always look out the window of the orphanage
But the people who passed by would
look at us like we were dirty

Eiko, why are you so nice to me?"

I replied,
"It's only natural, as a fellow human being,
to be nice to you
The people who look at you with scorn
Are nothing more than intelligent monkeys
We are supposed to help each other out
I'm sure God didn't intend for things to work out this way"

Eimee then mumbled sadly
"It feels so warm. I wish time could stop right now
If I could have one more wish
Will you write about me in a book?
That way I will not be forgotten
And I can travel all around the world"

Eimee, you must have known it
That your time left on earth was limited
The reason I carried you on my back
Was that I did not want you to see
The tears about to flood out of my eyes

I felt despair at my own helplessness
Eimee was plagued with an incurable illness
I walked along, feeling her warmth on my back,
Imagining how I might create more
memorable experiences with her
But this turned out to be the last pleasurable memory
between Eimee and myself

Part 3
Departing for the Silver World

A few months after I returned to Japan
I heard from the director of the orphanage
That Eimee's condition was not very good
I hurried to get myself to Kolkata

Eimee lay thin and small,
Asleep in her bed.
I took her into my arms and told her,
"I'm back, like I promised"
"I was waiting for you, I knew you would come back.
I want to put on that white dress again
And hear stories about the snow,"
She begged

Eimee, when I was six years old,
Just like you at the time that we met
The fierce wind outside banged on the window
and called to me
And afterwards the fresh snow after the storm
Was shimmering in the moonlight
Sparkling in a shiny blue color
I had never seen anything so mysterious before
And somehow I could see illusions of
wind and snow that would follow

Suddenly the wind grew strong
I held my breath
The powdery, shimmery snow on the ground's surface danced
up into the sky
Like a horse heading for the heavens
It created the form of Pegasus
And flew away far and high up into the great big sky

Eimee, it has come to fetch you
Do you see that shiny silver Pegasus of snow?
This is my final, sad farewell to you
That silver world of snow you dreamed about
That Pegasus I saw in my childhood
I know now that it was for you

So climb onto that horse
Forget the sorrows of having been born to this world
You can feel everything, see across everything
I won't say goodbye
Because you have such a happy smile on your face

"Eiko, my only family
I hated the name I had been given
They gave it to me as if it was a number
But now I have a name that Eiko gave me
I will carry them all away
All the sorrows that Eiko has carried
So that Eiko can be happy from now on
My name is Eimee
Thank you, Mommy"
And then in my arms
Eimee disappeared, like the snow

My dear beloved angel, my dear beloved daughter
The only person I was able to confide my sorrows in
My dear, beloved, true friend
Let's meet again somewhere else
But there's no need for you to return
to a world such as this
After I fulfill my great promise to you
I will come to see you
And we can talk again then
About how this world truly should be

Eimee, I will tell you this
No matter how long we live
It's meaningless if we don't see the
value of having been given life
People's hearts are always fickle, changing like the seasons
Even if I lighten their load
After some time passes, I am forgotten about
And yet there are people who need me
So my work is not yet finished.

When the breeze through the buildings
sounds a joyful rhythm
And the faint sounds of desire crawling about the
ground can be freely recognized
And all the ugly noises of the world sound pleasant
Then I will sound my victory bell high into the air
It is the sound of kind, gentle truth

In a sad lonely evening, when unspeakable sorrow
Creaks around the depths of memory
If you hear a tapping at the window of your heart
Be brave, and open that window
There might be a hidden, true friend
Waiting for you there

Her name is Eimee
That is the name that I gave her





あなたの中で
くるくる踊りながら、笑いながら
私は少女へと戻る

तुम्हारे अंदर
झुम–झुम के नाचते हँसते
में लौटती हूँ अपने मासूम बचपन मे

I laugh as I dance and twirl
Inside you
I return to childish innocence

前作『ゴムの木 - 愛の形、
そして透明へ』からの引用

पिछली पुस्तक 'रबड़ के पेड़'–
स्नेह का रूप, स्पष्टता की ओर'' से

From the earlier Book "The Rubber Trees—
The Shape of Affection, Moving Toward Clarity"

銀世界のエイミー

सितारों की दुनिया की एइमी

Eimee of the Silver World

Reviewer/Hindi Translation: Ashok K. Chawla

SHAPING YOUR FUTURE BEYOND LIMITS

PIGEON BOOKS

www.pigeonbooks.in pigeonbooks@yahoo.com

ISBN 978-93-84401-64-1

Poem ₹ 160